

タイトル：2019年度 教育セミナー（第15回）

日時：2019年9月19日（木）～22日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階大会議室（303）

「預言者の叔父、イスラーム、ペルシア語——『ハムザ物語』の世界」

近藤 信彰（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

本報告では、預言者ムハンマドの叔父にあたる Hamza b. 'Abd al-Mutallib を主人公とした前近代のムスリムの間で最も読者・聴衆の多かったとされる物語、『ハムザ物語』の流行について、アラブ圏から東南アジアにいたる広大な地域を対象にして述べた。報告者はもともとペルシア語文化圏（イラン、中央アジア、インドなど主にペルシア語が文語として用いられた地域）についての研究を行っており、韻文を中心とするペルシア語文学の流行とその担い手である文人の移動などについて検討してきた。しかし、ペルシア語が媒介として運んだものの具体的な内容に立ち入ることはできなかった。散文作品である『ハムザ物語』はその意味で研究を進める最適の材料であると考えたのである。

まず、歴史上のハムザと物語のハムザの関係について検討した。ハディースや預言者伝に登場するハムザは勇猛で豪快な人物であり、イスラーム最初の聖戦を行った者でもある。しかし、物語では、サーサーン朝のアヌーシールヴァーンに仕え、その娘と恋に落ち、結婚を成就させるために、各地を転戦する姿が描かれる。彼の改宗は、物語の最後、ウフドの戦いで戦死する直前におかれるのである。

物語の起源について、ロンケル以来、ペルシア語版がもとで、アラビア語版がその翻訳であると考えられてきた。この説を否定する決定的な材料はないが、少なくともロンケルが利用したアラビア語版のバリ写本と現行の刊本では、ハムザの父親の名前が違うこと、近世に記されたペルシア語の関連文献ではアラビア語から翻訳されたことを主張する記述が複数あることを指摘した。ただし、アラビア語版以外の版はすべて、ハムザを預言者の叔父としていることからして、広域に流通した版はペルシア語版がもとであると考えられる。

続いて、ペルシア語版やその派生と思われる諸言語版について説明した。しばしば引用される『シースターン史』の記述は、必ずしも8世紀末にこの物語が成立したことを示すものではない。遅くとも、14世紀にはイルハーン朝やシリアでこの物語が流行していたことが文献からわかる。現存する最も古いペルシア写本は15世紀グジャラートで作られたものである。その後、近世のオスマン朝、サファヴィー朝、ムガル朝では絶大な人気をえて、挿絵入りの豪華写本が作られ、あるいは、講釈師のマニュアルが著されるほどであった。さらに、物語は遅くとも16世紀初めには東南アジアに到達し、マレー語に翻訳され、さらにジャワ語など東南アジア島嶼部の諸言語に翻訳された。

近代に入っても、講談や演劇、影絵芝居、木偶人形芝居などさまざまな形で各地の民衆文化として発展を遂げた。ただし、イランにおいては、レザー・シャーの政策により、『王書』以外の講談が禁じられたため、衰退していった。オリエンタリズムにもナショナリズムにも認められなかったことが、『ハムザ物語』の研究の遅れにつながっている。